



猿は蛙から知恵者といわれて得意気だった。

猿「それよなあ、うめいものは今すぐ食うべえと思ってもできねえんだ、これからおめえさんと田んぼを作り稲を作って秋にはなんぼう食ってもたべきれねえ程のいっぱい餅ついてな、狸どものように腹鼓をうってみていもんだなあ。」

蛙はひととき大きな丸目玉をギョロツとむいて「それは賛成、大賛成だ。」と大よろこび、かくして田をつくる相談は決った。

やがて花も咲いて暖かになって来た。百姓は毎日せっせと苗代を作り種まき準備に忙しい、それでも猿からはいっこうに相談した田んぼ作りの話がない。正直者の蛙は気が気でない。そして猿どんを訪ねてみた。猿は日だまりに長々と寝そべって気持よさそうに昼寝の真最中である。

蛙「猿どん、猿どんよその家ではみんな種まきの用意をしているよ、おれも気がもめてなあ。猿どん都合